

主婦の家事意識に関する研究

荒深 美和子^{*1} 櫻井 のり子^{*2} 辰巳 渚^{*2}

金城学院大学生活環境学部^{*1}

金城学院大学消費生活科学研究所^{*2}

Research related to Housework Knowledge of the Housewife

Miwako ARAFUKA^{*1}, Noriko SAKURAI^{*2}, Nagisa TATSUMI^{*2}

Faculty of Human Life and Environment, Kinjo Gakuin University^{*1}

Institute for Consumer Sciences and Human Life, Kinjo Gakuin University^{*2}

1. はじめに

総務省統計局によると、2007年から2012年のデータで「夫婦と子供のいる世帯」の妻の有業率は各年代においておおむね増加しており、2012年には「25～29歳」44.0%、「30～34歳」50.2%、「35～39歳」57.4%、「40～44歳」66.2%である¹⁾。女性や家族の意識の変化や家計の必要性から就業傾向が強まっていると考えられるが、職業の有無にかかわらず、衣食住にかかわる家事の量はあまり変わらない。

野崎有以によると²⁾、戦後、はじめは民主的な家庭の建設をテーマに家庭科が成立したが、高度経済成長期に入ると男女別の教育内容からさらに高等学校の女子のみ必修となった。男女平等という建前よりも、産業社会における労働力としての男性と家庭を守る女性という役割分業が当たり前とされていった。その後、中学校においては1993年から、高等学校においては1994年から男女共修の家庭科が実施されるようになったが、2014年3月の一般社団法人大学女性協会の報告書における高校生に対する意識調査では、男女平等意識は浸透しているものの具体的な家事については女性の方が得意だと思いと答えている³⁾。女性たちは、これらの考えについて不合理と感じながらも、社会進出と家事負担受け止めているのが現実であろう。

また、家事知識や技術の習得に関して、サラ・A・レヴィットが学校の家庭科教育以外の雑誌や文献における家事アドバイザーの役割について指摘している点が興味深い⁴⁾。19世紀以来の新生アメリカ合衆国の基礎としての家庭を守る主婦たちに対して家事運営のモデルを示す役割を果たしたのが、家事アドバイザーたちであった。そして20世紀の世界大戦後の女性の社会進出や女性運動の高まりの中においても、人々の家庭生活のモデルは厳然と存在し、また女性はその責任を常に持つという概念から離れることはなかった。現代における仕事を持つ主婦たちにとっても、忙しい中でも家事をきちんとこなし、楽しく幸せな家庭生活をつくるかについて大きな関心が払われている。そのような中で、カリスマ主婦と呼ばれる家事アドバイザーたちの家事のアイデアは大きな人気を集めている。家事の負担が減らないのであれば、楽しい雰囲気の中で、またせめてモデル的な家庭像に少しでも近づけることで、自分自身を納得させる

という知恵であるかもしれない。現代日本においてもカリスマ主婦と呼ばれる人たちの雑誌記事や著作が目につき、家庭の主婦たちの家事知識や技術のよりどころとしていることも考えられる。

以上のような視点から、本稿は現代の家庭生活における「家事の負担の現状」「家事知識の獲得」「家事に対する意識」等について明らかにしようとするものである。

2. 調査の概要

1) 調査の対象と時期

調査協力を得られた名古屋市内の私立の中高一貫校（共学）に通う生徒の家庭を対象とした。調査時期は2014年6月、配布数は700で有効回収数は195、回収率28%であった。

2) 調査の形式

アンケート用紙を作成し、在校生を通じて家庭に配布し、主たる家事の担い手に記入してもらい、在校生を通じて回収する形式をとった。無記名とし、個人が特定されないように配慮した。

3) 調査票の内容

アンケート調査の内容は、大きく以下の10項目について20問の質問からなっている。

- ① 調査票記入日・年齢（問1）
- ② 就業形態（問2）
- ③ 家族構成（問3）
- ④ 家事の頻度・分担（問4、問5、問6、問7）
- ⑤ 家事に対するイメージ（問8）
- ⑥ 好きな家事・嫌いな家事（問9、問10）
- ⑦ 夫や子供の手伝い（問11、問12、問13、問14）
- ⑧ 片づけと収納（問15）
- ⑨ 家事知識の伝承（問16、問17、問18）
- ⑩ 参考にする雑誌・家事アドバイザー（問19、問20）

3. 調査結果の分析

1) 調査対象者の構成

(1) 年齢（問1）

調査対象者195名の年代別構成は、30代12%（24名）、40代75%（147名）、50代8%（16名）、60代・70代（各1名）1%、年齢不詳3%（6名）であった。就業形態別の平均年齢は、フルタイム43.9歳、パートタイム44.2歳、専業主婦44.6歳、その他45.6歳、不詳40.0歳で、年齢不詳を除いた189名の平均年齢は44.4歳であり、就業形態による有意差はなかった。

(2) 就業形態（問2）

就業形態は「フルタイムの仕事（正社員等）」「パートタイムの仕事」「専業主婦」「その他」の4項目で質問した。「その他」には自営、お寺、ピアノ教師など様々の場合が含まれており、今回は「その他」を除く就業形態を選択した人別の分析を中心に行った。調査対象者の就業形態別の構成は、フルタイム30%（58名）、パートタイム26%（50名）、専業主婦30%（58名）、その他14%（28名）、不詳1%（1名）であった。なお、分析にあたり「全体」は「その他」「不詳」を含む調査対象者195名とする。

(3) 家族構成（問3）

家族構成の質問は同居の家族について、続柄、性別、年齢、職業を記入してもらった。家族形態別、家族類型別の分析は今後の課題とし、今回は家族数のみを分析した。家族数の分布は、2人6%（12名）、3人17%（33名）、4人44%（86名）、5人23%（45名）、6人6%（11名）、7人1%（2名）、9人1%（1名）、不詳3%（5名）であり、4人家族が最も割合が高かった。就業形態別に平均家族数をみると、フルタイム3.8人（58名）、パートタイム4.2人（50名）、専業主婦4.3人（58名）、その他4.3人（28名）、不詳5.0人（1名）であり、全体の平均家族数は4.1人であった。フルタイムで家族数が少なく、専業主婦ほど家族数が多いことがわかる。

2) 家事の頻度・分担

日常の家事として、今回の調査では「買い物」「食事の準備」「食事の片づけ」「子供の世話」「洗濯」「洗濯物たたみ」「アイロンがけ」「掃除（浴室・トイレを除く）」「浴室の掃除」「トイレの掃除」「家計簿つけ」「洋裁」の12種類の家事について調査を行った。なお、「その他」には具体的に分担している家事を記入してもらった。

(1) 家事の頻度（問4）

家事の頻度は12項目の各家事について「毎日」「2・3回/週」「1回/週」「2・3回/

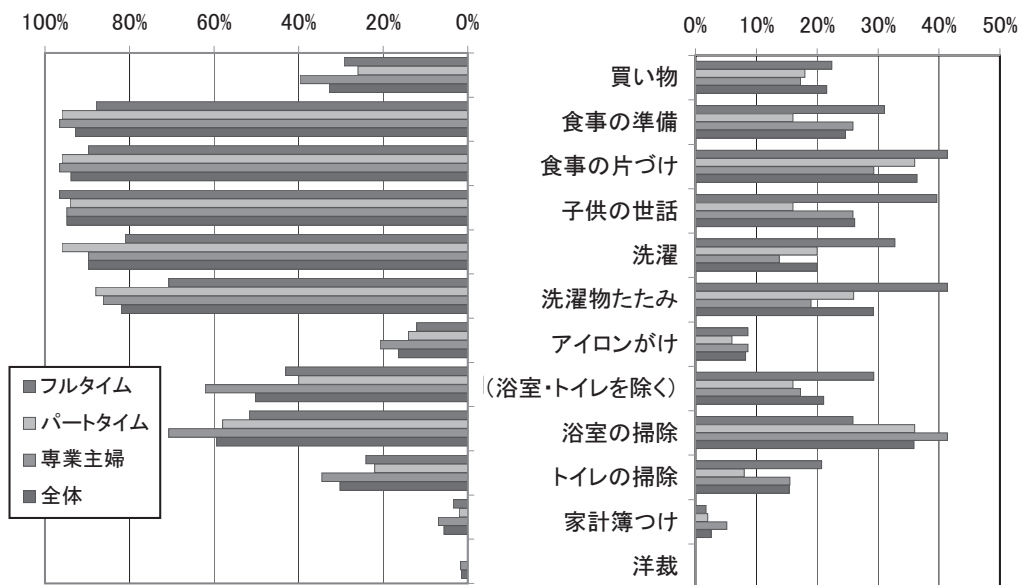


図1. 毎日している家事

図2. 家族で分担している家事

月「しない」の5段階で質問した。図1に毎日している家事の割合を就業形態別に示す。全体で見ると「子供の世話」95%、「食事の片づけ」94%、「食事の準備」93%、「洗濯」90%と9割以上の人が毎日している家事であった。「掃除」を毎日している人は50%で、「浴室の掃除」59%、「トイレの掃除」30%であった。「買い物」も33%と3分の1の人が毎日していた。「家計簿つけ」「洋裁」においてはほとんどの人が毎日してはしなかった。

就業形態別に比較してみると、フルタイムで一番高かった家事は「子供の世話」97%、パートタイムが一番多かった家事は「洗濯」96%、「洗濯物たたみ」88%、それ以外の9つの家事では、専業主婦がフルタイム・パートタイムの仕事を持っている人より頻度が高かった。専業主婦の「食事の準備・片づけ」97%、「浴室の掃除」71%、「掃除」62%、「買い物」40%、「トイレの掃除」34%、「アイロンがけ」21%と明らかに高いことがわかった。

(2) 食事の準備・片づけの主な担い手 (問5・問6)

家事の中でも「食事の準備・片づけ」の主な担い手は、「食事の準備」92%、「食事の片づけ」87%が主として自分で、夫が担っているのは「食事の準備」1%、「食事の片づけ」3%である。「その他」の担い手としては、祖母、母、義母、夫と半々、家族と分担、各自それぞれなど、「食事の準備」7%、「食事の片づけ」10%であった。

(3) 家族と分担している家事 (問7)

家族と分担している家事をすべて選択してもらった(図2)。分担している家事のうち一番割合の高かったのは「食事の片づけ」37%で、フルタイム41%、パートタイム36%、専業主婦29%と仕事を持っている人の方が高かった。次に高かったのは「浴室の掃除」36%で、こちらは逆にフルタイム26%、パートタイム36%、専業主婦41%という結果であった。一方、分担している家事は無いという人もフルタイム16%、パートタイム22%、専業主婦29%、全体で22%いたことから、家事は主婦が担うものという考えを持っている人も根強くいることがわかる。12

の家事以外で分担している家事として、「その他」には弁当作り、ゴミ出し、ペットの世話、犬の散歩などが4%あった。

3) 家事に対するイメージ (問8)

家事に対するイメージを表す言葉として、9つの項目「楽しい」「価値がある」「やりがいがある」「必要がある」「単調である」「面白くない」「負担を感じる」「やりたくない」「その他」で複数回答してもらった結果を図3に示す。「その他」の意見としては、「お手伝いさんにしてもらいたい」

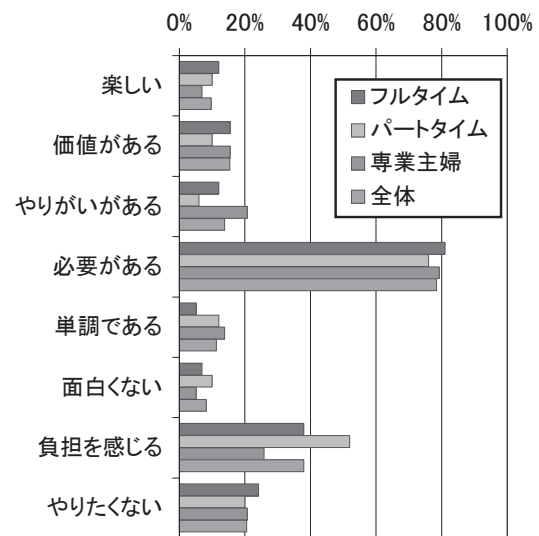


図3. 家事に対するイメージ

「家族の健康的な生活を守るもの」「義務」「子どもが小さい頃は楽しかった」「自分しかやる人がいないので、仕方ない」「生活する上で仕方ない」「当たり前にならなければならない事」などがあつた。全体でみると、「必要がある」が78%となつており、専業主婦では81%の人が選択していた。また、パートタイムの「負担を感じる」が52%と抜きんでており、フルタイム38%、専業主婦26%と続く。家事を肯定するイメージの「楽しい」「価値がある」「やりがいがある」は10%~15%で、専業主婦の「やりがいがある」は21%と高く、フルタイムの方がパートタイムより高い。

4) 好きな家事・嫌いな家事 (問9・問10)

図4に最も気に入っている家事と最も嫌いでやりたくない家事を1つだけ選択してもらつた結果を示す。最も気に入っている家事は、全体でみると「買い物」31%、「食事の準備」21%、「洗濯」14%、「子供の世話」13%となつている。「洗濯物たたみ」を好きな人は一人もいなかった。また、好きな家事のない人は6% (18名) いた。好きな家事の「その他」の中には「パン作り」「庭の草むしり」「犬の散歩」「ひとつにはきめられない」などがあつた。最も嫌いでやりたくない家事は、「食事の片づけ」15%、「食事の準備」14%、「アイロンかけ」・「家計簿つけ」12%、「掃除(浴室・トイレを除く)」となつていた。「子供の世話」を嫌いな人は一人もいないという結果で、嫌いな家事の無い人は6% (12名) いた。嫌いな家事の「その他」には「庭の手入れ」「庭の草むしり」「全て」などがあつた。

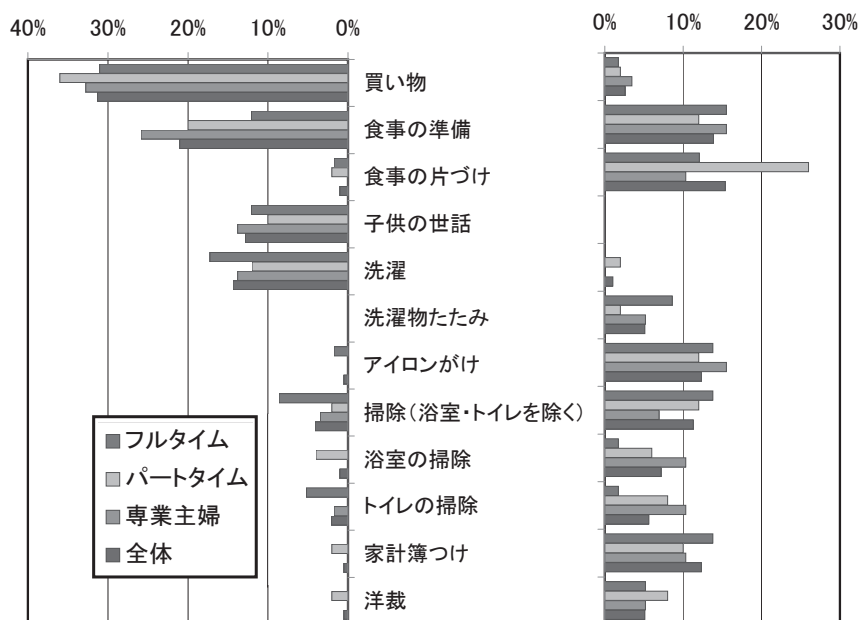


図4. 好きな家事・嫌いな家事

5) 家事の夫婦分担に対する考え (問11)

家事の夫婦分担についてどのように考えているかを、5項目「1. 夫が外で働いて、妻は家庭で家事を負担すべき」「2. 妻が仕事を持っていても家事は妻が負担すべき」「3. 妻が仕事を持っている場合は夫も家事を分担すべき」「4. 妻が仕事を持っているかどうかにか

かかわらず、夫婦で分担すべき」「5. その他」で質問した。全体でみると「妻が仕事を持っている場合は夫も家事を分担すべき」48%、「妻が仕事を持っているかどうかにかかわらず、夫婦で分担すべき」29%であり、8割近くの人が家事は夫も係わり、夫婦で分担するものと考えていることがわかった。「妻が仕事を持っているかどうかにかかわらず、夫婦で分担すべき」ではフルタイム39%、パートタイム34%、専業主婦25%と、フルタイムで1番高い数値となっていた。

6) 夫と子供の家事分担

図5は夫に最もして欲しい家事を1つ選んでもらった結果と子供に手伝わせている家事(複数回答)の結果である。

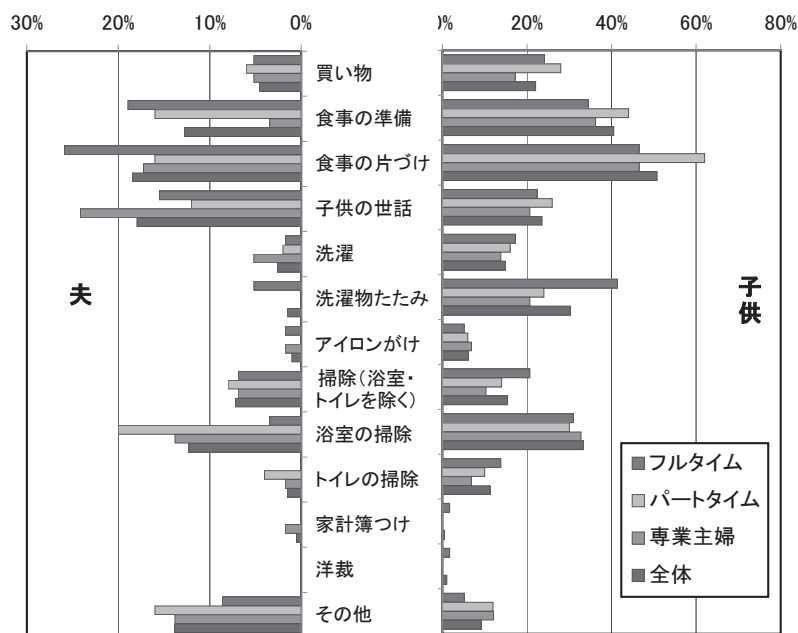


図5. 夫と子供の手伝い

(1) 夫に最もして欲しい家事 (問12)

夫に最もして欲しい家事は、「食事の片づけ」・「子供の世話」18%、「食事の準備」13%、「浴室の掃除」12%となっている。夫にして欲しい家事が無い人は8% (15名) いた。「その他」の意見は「ゴミだし」「犬の世話」「庭の掃除」「庭の草むしり」「家の修理」「車の管理」「力仕事」など、中には「して欲しくない」「してもらっても気に入らない」という意見もあった。

(2) 子供に手伝わせている家事 (問13)

子供に手伝わせている家事は、「食事の片づけ」51%、「食事の準備」41%、「浴室の掃除」33%、「洗濯物たたみ」30%、「子供の世話」24%、「買い物」22%となっており、夫より子供に家事を手伝わせていることがわかった。「その他」の家事としては、「ゴミだし」「ペットの世話」「犬の世話・散歩」「花木の水やり」「草むしり」「新聞取り」「布団干しと取り入れ」「洗濯物の取り込み」「自分の弁当作り」などがあつた。子供に何も

手伝わせていない人は、フルタイム14%（8名）、パートタイム10%（5名）、専業主婦12%（7名）、全体12%（24名）であった。

(3) 子供の手伝いに関して（問14）

子供の手伝いに関してどう思うかを7項目「1. 男女問わず生きる力を身につける点で家事を手伝うことは必要である」「2. 女の子は将来の主婦として必要であるので手伝わせる」「3. 男の子はあまり必要ないと思うので手伝わせない」「4. 親子のコミュニケーションの機会として手伝わせる」「5. 子供が手伝いたいといえば手伝わせる」「6. 子供は勉強で忙しいので手伝わせない」「7. その他」で複数回答してもらった。「男女問わず生きる力を身につける点で家事を手伝うことは必要である」が82%と高く、次に「親子のコミュニケーションの機会として手伝わせる」31%、「子供が手伝いたいといえば手伝わせる」22%、「女の子は将来の主婦として必要であるので手伝わせる」18%であった。「男の子はあまり必要ないと思うので手伝わせない」は0%で、「子供は勉強で忙しいので手伝わせない」もわずか1%であった。「その他」には「させたいが子どもが嫌がるし帰りが遅い」「できるようになるのを待てばよい」などがあつた。

7) 片づけと収納（問15）

(1) 片づけ

片づけに対する考えを5項目「1. いつも気を配ってきれいにしているので、不意の来客があつても大丈夫である」「2. 少し散らかつていても不意の来客などの場合はすぐに片づけることができる」「3. 片づけたいと思つているが、なかなかできないのでストレスに感じている」「4. 散らかつていてもあまり気にならない」「5. その他」のうちでもっとも近いものを選択してもらつた。図6に示すように、全体の51%の人が不意の来客に対応できると答えているが、フルタイムと専業主婦では59%と高い。パートタイムの主婦では46%とストレスに感じている人が多かつた。

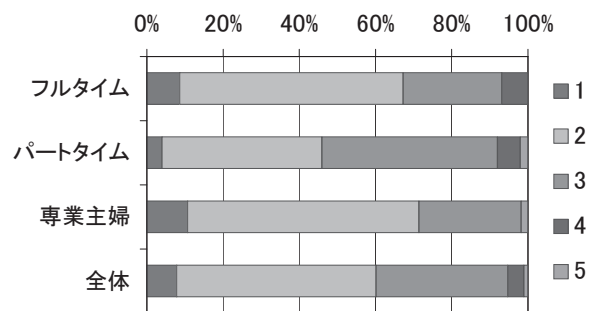


図6. 片づけに対する考え方

(2) 収納スペース

各収納スペースについて「十分」「不十分」で選択してもらつたが、「十分」と答えた割合をみると、「キッチン」63%、「ダイニング」62%、「リビング」56%、「主寝室」59%、「子供室」55%、「洗面・浴室」70%、「トイレ」77%であつた。各部屋の収納スペースはおおむね6割以上で十分と考えているが、「リビング」や「子供室」ではその割合がやや低い。就業形態別には「ダイニング」を除くどの部屋もフルタイムの主婦が一番割合が高かつた。

収納スペースに対する考えを4項目「1. 収納が少ないと片付きにくいのでできるだけ多く収納をとるほうがよい」「2. ものを厳選して持つことが重要で収納は適度にとる」「3. 収納の量より部屋の用途や収納するものに合わせた収納をとる必要がある」「4. その他」のうち最も近いものを選択してもらった。モノの増加に対応しきれていない部分があると思われるが、収納に対しては約30%がスペース量を求めている。しかし、専業主婦以外はモノを厳選することや用途やモノに合わせた収納を適正にとる必要があると考えており、むやみに量を求めるという傾向は少ないことがわかる(図7)。

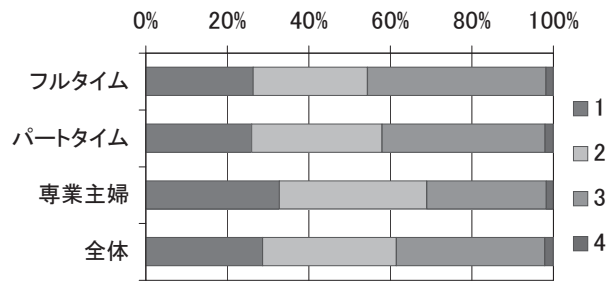


図7. 収納スペースに対する考え

8) 家事知識の伝承

(1) 調理の知識 (問16)

調理のレシピ等の知識はどのようにして得たのか、6項目「1. 祖母や母親によって教えられたり、慣れ親しんでいた味」「2. 学生時代の授業等」「3. 市販のレシピ本」「4. テレビの料理番組」「5. 料理教室」「6. その他」のうち最も影響を受けたもの1つを答えてもらった。最も影響が大きかったものは「祖母や母親によって教えられたり、慣れ親しんでいた味」64%で、次が「市販のレシピ本」19%であった。「その他」には「インターネットでレシピを調べる」という意見が多かったことから、テレビやネットから調理の知識を得る人も10%以上いることがわかった。就業形態別にみても差はほとんどなく、「学生時代の授業等」は5%以下、フルタイムの「料理教室」が10%であった。(図8)

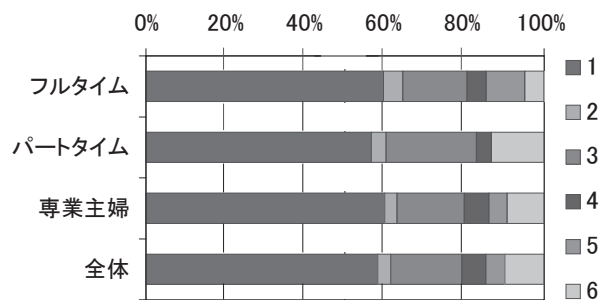


図8. 調理の知識

(2) 住まいの知識 (問17)

掃除や片づけやインテリア等、住まいについての知識をどのように得たのか、6項目「1. 祖母や母親によって教えられた方法」「2. 学生時代の授業等」「3. 市販の雑誌や本」「4. テレビの番組」「5. カルチャーセンターなどのインテリアや整理の講座」「6. その他」の中から最も影響を受けたものを1つ選択してもらった。「その他」の具体的な記述は「自己流」「インターネット」などであった。全体で見ると、「市販の雑誌や本」40%、「祖母や母親によって教えられた方法」37%であったが、フルタイムでは「祖母や母親によって教えられた方法」47%と最も割合が高く、パートタイム36%、専業主婦26%と減少している。逆に「市販の雑誌や本」は、フルタイム31%、パートタイム42%、専業主婦

主婦55%と増加していた。「学生時代の授業等」と「カルチャーセンターなどのインテリアや整理の講座」を選択した人はほとんどいなかった。(図9)

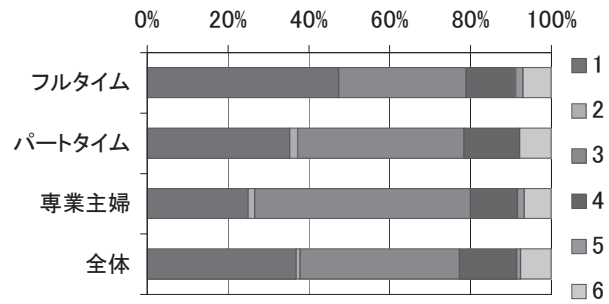


図9. 住まいの知識

(3) 衣服の知識 (問18)

衣服の手入れ等についての知識をどのように得たかは、6項目「1. 祖母や母親によって教えられた方法」「2. 学生時代の授業等」「3. 市販の雑誌や本」「4. テレビの番組」「5. カルチャーセンターなど」「6. その他」の中から最も影響を受けたものを1つ選択してもらった。「その他」の具体的な記述は「自己流」「自然に」「インターネット」「衣類についている表示」などであった。「カルチャーセンターなど」を選択した人は1人もいなかった。全体で見ると、「祖母や母親によって教えられた方法」58%、「市販の雑誌や本」16%、「テレビの番組」14%で、フルタイムの人は66%が「祖母や母親によって教えられた方法」であった。(図10)

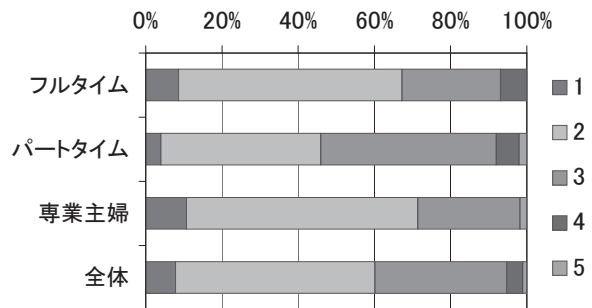


図10. 衣服の知識

9) 参考にしている雑誌や家事アドバイザー

(1) 参考にしている雑誌 (問19)

家事の知識を得るために参考にしている雑誌を16種類あげ、複数回答で尋ねた結果を表1に示す。家庭生活の参考に雑誌等を読んでいるという人は全体の51%で、半数は読まないという回答であった。「婦人画報」「家庭画報」「主婦の友」「ミセス」などは発刊以来50年から100年という歴史を持つ主婦層を対象とした雑誌であり、都市中流家庭の主婦を対象に、「理想的な家庭生活像」作りに一役買ってきたが、今回の調査対象の主婦たちにとってはあまり身近ではないようである。いわば家庭生活に関する雑誌と考えられるものの購読者は少ない。「暮らしの手帖」なども戦後の日本の家庭生活の在り方に影響を与えてきた雑誌であるが、ほとんど知られていないようである。このような中で、購読者が比較的多いのは、「クロワッサン」18%、「ESSE」15%、「サンキュ！」13%、「Mart」12%である。これらは1977年から2004年ごろまでに新しく創刊された雑誌で「婦人画報」などの歴史の長いものと比べ、若い主婦層を対象に日常生活に身近な生活情報を提供し、低価格で気軽に購入できる。中流家庭の理想の「家庭生活像」というより、気軽にすぐ役立つという点が好感を持たれているのだろう。

表 1. 参考にしている雑誌

	フルタイム(58名)		パートタイム(50名)		専業主婦(58名)		全体(195名)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
日経ウーマン			1	2%			4	2%
婦人画報	5	9%					5	3%
家庭画報	6	10%			1	2%	8	4%
主婦の友	4	7%	3	6%	3	5%	11	6%
ミセス	2	3%					3	2%
天然生活	3	5%			5	9%	8	4%
クロワッサン	14	24%	7	14%	9	16%	35	18%
暮らしの手帖	1	2%	1	2%	1	2%	3	2%
ESSE	11	19%	7	14%	8	14%	29	15%
サンキュ!	4	7%	7	14%	11	19%	26	13%
すてきな奥さん	6	10%	6	12%	5	9%	18	9%
かぞくのじかん	1	2%					1	1%
Como	1	2%			1	2%	3	2%
リンネル	1	2%	1	2%	3	5%	6	3%
Saita					2	3%	2	1%
Mart	5	9%	7	14%	9	16%	23	12%
その他	1	2%	2	4%	5	9%	12	6%
harumi					1	2%	1	1%
LEE					1	2%	1	1%
story					1	2%	1	1%
オレンジページ	1	2%	2	4%	3	5%	9	5%
読まない	26	45%	28	56%	29	50%	95	49%

表 2. 参考にする家事アドバイザー

	フルタイム(58名)		パートタイム(50名)		専業主婦(58名)		全体(195名)	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
やましたひで子	1	2%			5	9%	6	3%
有元葉子	2	3%	1	2%	6	10%	11	6%
阿部絢子					1	2%	1	1%
沖幸子	1	2%			2	3%	3	2%
松居一代	4	7%			7	12%	12	6%
辰巳渚			1	2%	4	7%	5	3%
栗原はるみ	22	38%	12	24%	32	55%	82	42%
その他	1	2%	2	4%	1	2%	5	3%
ケンタロウ							1	1%
磯部作善子	1	2%					1	1%
久野木順一			1	2%			1	1%
芳賀裕子			1	2%			1	1%
近藤麻理恵			2	4%	1	2%	3	2%
無し	32	55%	36	72%	23	40%	103	53%

(2) 参考にしている家事アドバイザー (問20)

家事知識について専門家として、「やましたひで子」「有元葉子」「阿部絢子」「沖幸子」「松居一代」「辰巳渚」「栗原はるみ」の8人の本を読んだことがあるかを尋ねた結果を示す(表2)。雑誌購読と同様に53%の人が参考にする家事アドバイザーはないと答えている。参考にしている人としては、テレビや雑誌で取り上げられることが多い料理研究家「栗原はるみ」が42%で群を抜いている。続く「有元葉子」6%も料理研究家としてテレビ番組を持っていたことがあり、「松居一代」6%はタレントとして活躍してい

るなど、テレビの影響が大きいと考えられる。他の人たちは家事や料理に関する著作はあるもののあまり知られていないようである。「その他」としては、片づけコンサルタントを自称している「近藤麻理恵」2%などがあつた。

10) 自由意見

自由意見欄に記入した人は80名で、年代別には40代が59名、30代が11名、50代が9名であつた(表3)。否定的な意見を持つ人、肯定的な意見を持つ人は、それぞれ23名、27名とほぼ同じであつた。否定的な意見の人には「毎日の食事を考えるのが面倒くさい」「掃除してもすぐ汚れる」「努力しても気づかれない」「休む間がない」など、途切れることのない家事に少々疲れている様子が見られる。肯定的な意見の中には、「大変だが家族のためになると思うと喜びを感じる」とか「栄養バランスを考えながら」頑張っている様子が見える。やる以上は割り切っているという人の中には、義母の介護も引き受けている人もいる。夫婦と子供のための家事だけではなく、老親の介護の負担もかかっている様子が見られる。また、「外で働くようになって家事が大変になって不満が爆発したところ、主人や子供が手伝ってくれるようになった」というのもあつた。また、今後に対する意見としては「男性は仕事、女性は家事という考えや家庭生活も変化する」「子供に片付けの癖をつけさせる」「子供も、家事ができるようにしたい」など、家族みんなが負担する方向を願っている。家事の外部化について肯定的に述べている意見も数件見られたが、「家政婦がほしいが家の中に触れられたくない」など、便利さとプライバシーの折り合いが難しそうである。

表3. 年代別の自由意見

	30代	40代	50代	年齢不詳	計
喜びを感じる肯定的	4	19	4	0	27
やる以上は割り切る	0	5	0	1	6
大変、苦痛など否定的	4	18	1	0	23
今後に対する意見	3	17	4	0	24
計	11	59	9	1	80

4. まとめ

家事の頻度については、「子供の世話」「食事の片づけ」、「食事の準備」、「洗濯」などを9割以上の人が毎日している。ついで「掃除」(50%)、「浴室の掃除」(59%)、「トイレの掃除」(30%)、「買い物」(33%)などが続き、全体では専業主婦の方が仕事を持っている人より頻度が高かつた。

家事の主な担い手は、「食事の準備」や「食事の片づけ」はほとんど主婦で、夫はほとんど関わっていない。家族と分担している家事は「食事の片づけ」が多い。「浴室の掃除」については、逆に専業主婦の方が家族と分担している。全く分担していない人も全体で22%いる。

家事に対するイメージについては、「必要がある」が全体の78%であつた。家事に「負担

を感じる」はパートタイムが52%で、フルタイムや専業主婦と比べて多い。専業主婦は21%が「やりがいがある」と答えている。

最も気に入っている家事は、全体で見ると「買い物」「食事の準備」「洗濯」「子供の世話」などが比較的多く、好きな家事のない人は6%いた。最も嫌いでやりたくない家事は、「食事の片づけ」「食事の準備」「アイロンかけ」・「家計簿つけ」「掃除（浴室・トイレを除く）」などが多かった。嫌いな家事の無い人は6%いた。

家事の夫婦分担については、「妻が仕事を持っている場合は夫も家事を分担すべき」（48%）だけでなく、「妻が仕事を持っているかどうかにかかわらず、夫婦で分担すべき」（29%）で、8割近くの人が夫婦で分担するものと考えている。

夫にしてほしい家事は、「食事の片づけ」「子供の世話」「食事の準備」「浴室の掃除」などである。しかし、一方で「してほしくない」「してもらっても気に入らない」という意見もあった。子供に手伝わせている家事は、「食事の片づけ」「食事の準備」「浴室の掃除」「洗濯物たたみ」「子供の世話」「買い物」などで、夫より子供に家事を手伝わせている。子供に何も手伝わせていない人は、全体で12%いた。子供の手伝いに関しては、「男女問わず生きる力を身に着ける点で家事を手伝うことは必要である」と8割以上の人が考えている。

部屋の片付けについては、全体の6割の人が不意の相客に対応できると答えているが、パートタイムの主婦にストレスを感じている人が5割以上いる。収納スペースについてはおおむね6割以上で各部屋の収納を十分と考えているが、リビングや子供室ではその割合がやや低い。モノの増加に対応しきれない部分があると思われる。収納に対しては、約30%がスペース量を求めているが、残りはモノを厳選することや用途やモノに合わせた収納を適正にとる必要があると考えており、むやみに量を求めるという傾向は少ない。

家事知識や技術の伝承について調理は「祖母や母親によって教えられたり、慣れ親しんでいた味」が多い。「市販のレシピ本」の他、「テレビやネット」から調理の知識を得る人も10%以上いることがわかった。住まいの知識については、「市販の雑誌や本」「祖母や母親によって教えられた方法」が高かったが、フルタイムの人に「祖母や母親によって教えられた方法」が高かった。「学生時代の授業等」と「カルチャーセンターなどのインテリアや整理の講座」はほとんどいなかった。衣服の手入れ等についての知識については「祖母や母親によって教えられた方法」が最も多かった。

家庭生活の参考に雑誌等について、半数は読まないという回答である。購読者が比較的多い雑誌は、「クロワッサン」「ESSE」「サンキュ」「Mart」などの比較的新しく創刊された雑誌である。創刊50年から100年以上の歴史を持つ婦人雑誌が都市の中流家庭の生活モデルを示してきたのに対して、若い主婦層を対象に日常生活に身近な生活情報を提供し、低価格で気軽に購入できるという点が好感を持たれているのだろう。参考にする家事アドバイザーについては53%の人がないと答えている。料理研究家「栗原はるみ」が群を抜いているが、テレビの影響が大きいと考えられる。

自由意見欄については、毎日の繰り返しの中で疲れている様子が見られる反面、「家族のためになると思うと喜びを感じる」とか「栄養バランスを考えながら」頑張っている様子がかがえる。老親の介護の負担が抱えている人もあり今後の課題である。今後の家事については、家族みんなが負担する方向を願っており、家族の生活には家事はつきものと割り切りつつ協働の方向性を見ることができる。家事の外部化については肯定的な面もあるが、「家政婦がほしいが家の中に触れられたくない」など、意識の変革も必要である。

なお、この研究に際して金城学院大学消費生活科学研究所より研究費の一部を援助いただきました。感謝申し上げます。また、調査票の配布・回収にあたっては、金城学院大学生生活環境学部環境デザイン学科4年河合里栄の多大なご協力をいただきました。合わせてお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 総務省統計局 統計トピックス No.74女性・高齢者の就業状況－勤労感謝の日になんで平成25年11月22日
- 2) 『「生活科学」から「家政学」へ－矮小化の過程の考察』野崎有以、東京大学大学院教育学研究科紀要 第50巻 2010年
- 3) 『JAUW 委員会報告2014 ジェンダー平等の視点から家庭科教育を考える－アンケートからみる男女平等教育の現状と課題－』一般社団法人大学女性協会 2014年3月
- 4) 『アメリカの家庭と住宅の文化史』サラ・A・レヴィット著 岩野雅子ほか訳 彩流社 2014年